

21PO-am409

患者との対話による医薬品適正使用の実現に向けた教育の実践と評価

○奥井 順子¹, 内海 美保¹, 山原 弘¹ (¹神戸学院大薬)

【目的】医薬品の適正使用に向けては、薬理学や製剤学などの知識教育以外に、薬剤師が医薬品を取り扱う患者・家族・医療従事者等と対話や協働していくことを念頭にヒューマニティ・コミュニケーション教育を充実させていく必要がある。その働きの中で副作用はもとより薬害を防止していくことは、薬剤師の一つの大きな責務であるともいえる。神戸学院大学では、患者・家族の視点に立ち、薬害の根絶に向けて能動的に寄与できる薬剤師の育成に向け、薬害被害者または家族を招聘した薬害教育を実施している。また、これら薬害教育の効果について継続的な調査を進めているが、今回、同教育が学生に与えた影響を質的に分析したので、報告する。【方法】2018年11月に、本学1年次生に対して薬害教育（1日目：計6種類の薬害を班ごとに調査，2日目：発表会，3日目：薬害被害者（スモン）の講演会）を実施した。授業終了後、自記式評価票にて学習の到達状況や感想等を記載してもらった。【結果・考察】235名の学生から回答が得られた。高校までに薬害教育を受けたことがある学生はわずか8.9%であった。また、授業後「薬害は人為的に引き起こされるものだ」と感じた学生は93.6%であり、「薬剤師には、薬害を防止する重要な役割がある」と感じた学生は98.3%を占めた。自由記述では、「様々な薬害についての原因や背景を知り、実際に講演を聞くことで理解を深めることができ良い機会になった。」「世間のニュースや新聞をうのみにするのはいけないと思った。」「国や行政に恨みを感じることはできないくらい被害者の方は今後どのような生活を送っていくかに悩んでおられることを知った。」「被害者の方が快適に暮らしていけるような社会を作っていきたい。」などの回答が得られた。詳細はポスターにて報告する。